

か ん も く

# 緘黙症

## 当事者と保護者の小体験記集 第2集

### 目次

はじめに		p.1
1. 「緘黙症のまま大人になってしまった娘」		
小橋 さつき (保護者)		p.2
2. 「緘黙児だった私と子どもたち」		
南 すみれ (保護者かつ当事者)		p.5
3. 「生きにくさを抱えて」		
中山 千恵子 (当事者)		p.7
4. 「支援により笑顔になった娘」		
松田 明子 (保護者かつ当事者)		p.9

2008年9月9日第1版発行

編集: かんもくの会  
ホームページ: <http://asmjapan.org/>

## はじめに

当会は昨年(2007年)、緘黙症の実像を広く知っていただくために、緘黙症の当事者と保護者による小体験記集を初めて制作しました。本体験記集はその第2集です。

今回の体験記集は二つの目的をもって制作しました。

一つは、成人後も重い緘黙症状に苦しむ人たちが及びその後遺症に苦しむ人たちが多数存在する事実を知っていただくことです。

従来、緘黙症は幼児期から学齢期にかけてのみ特異に現れる症状で、子どものうちにあるいは大人になれば治るものと漠然と捉えられているようです。

しかし現実には、成人後も緘黙症をそのまま持ち越している人たちが、緘黙症の症状自体は薄らいでもその二次的症狀として残る対人恐怖などのために社会生活に困難を抱えている人たちが多数います。

子どもの間は主に学校や園から緘黙児童生徒の報告がされるのでその存在が知られますが、大人になると代わりに報告する人がいなくなります。緘黙症が治った人たちは「小さいとき学校で喋れなかったのだけど自然に治った」とか「努力して克服した」と経験を話します。一方、克服していない人たちはいまだに苦しい思いをしていることを話せません。あるいはそれを知られることに抵抗を感じます。したがって治った話ばかりがよく聞かれるので、緘黙症はたいてい治ると捉えられていると考えられます。

当会の当事者会員や保護者会員のお子さん、その他の事例から、成人後の緘黙症の影響の残り方は人によって重度から軽度まで幅広いことがわかっています。しかし、自分の状態を言葉で伝えられないほど重い症状を抱える人たちの存在は誰かが代わりに伝える以外に知られる術がありません。本体験記集では、二人の保護者の方に成人後もなお重い緘黙症に苦しむお子さんの状況をご執筆いただきました。

それから、話せない症状は薄らぎ家庭をもって表面上はふつうの社会生活を送っているものの、子どもの頃の心の傷に悩まされ続けながら生きてこられた当事者の方に体験をご執筆いただきました。

本体験記集のもう一つの目的は、適切な支援方法に従った保護者による子どもの緘黙症克服支援の効果を知っていただくことです。

昨年7月、カナダの緘黙児指導書の邦訳書「場面緘黙児への支援」が刊行されました。同書による支援プログラムは、保護者が主体的に子どもの支援を実践できるように構築されています。当会では多くの保護者会員が子どもの緘黙症克服支援に取り組んでいますが、その中でいち早く同書のプログラムに従って支援を始められた方に一年間にわたる体験をご執筆いただきました。支援によりおさんは著しい改善を見せています。しかし、原書の書かれたカナダと異なる日本の学校環境で支援プログラムを遂行することは容易でないことも明らかになっており、支援を無理なく行える環境が整備されることを望みます。

かんもくの会  
代表 浜田貴照

### 子どもの場面緘黙の簡単な説明

場面緘黙の子どもたちはある特定の場面で口をききません。一般的に家では安心して話しますが、学校では自由に話すことができないのです。子どもの場面緘黙は、「話すことへの恐怖に何とか対処しようとする必死の試みなのだ」というのが私たちの見解であり、多くの専門家たちの見方です。緘黙児は話したいのかもしれませんが、恐怖への反応がそうはさせないのです。緘黙児が話さないことを自ら選択していると考えるのは不当だと思います。

(『場面緘黙児への支援－学校で話せない子を助けるために－』A. McHolm, C. Cunningham, M. Vanier／共著 河井英子・吉原桂子／共訳 田研出版より抜粋・構成)

※場面緘黙に対してあらゆる場面で話せない「全緘黙」があります。本体験記集では総称して「緘黙症」と呼びます。

## 緘黙症のまま大人になってしまった娘

小橋 さつき(保護者・仮名)

娘は現在20代半ばです。働きに出ることもできず、毎日を自宅で過ごしています。友だちは一人もいません。家族とも全くと言っていいほど喋ることができません。

娘は、赤ちゃんのころから極端におとなしい子でした。おなかが空いてミルクが欲しくても大きな声で泣くことはなく、寝つきや寝起きの時もグズグズ泣くことはありませんでした。人見知りが始まる月齢になっても、人見知りをして泣くこともありません。知らない人に抱かれても、おとなしく抱かれている子でした。

反抗期もありませんでした。駄々をこねることもなく、わがままも言わない、親の言うことは素直に聞く、手のかからない本当に良い子でした。けれども、私は、こんな娘が心配でもありました。『人見知りや反抗期が無かった子は、成長してから大きな問題が表面化する。』という話を聞いたことがあったからです。でも、反抗したりわがままを言ったりしない子に、自分を主張できるように係わってあげる方法がわからなくて、漠然とした不安を抱えたまま何もできなかったのです。

おとなしくて引っ込み思案な子であったため、友だちと触れ合って社会性を育てたいという思いもあり、3年保育へ通わせました。友だちをつくって元気に遊んでほしいと願っていました。

ところが、娘は園庭の隅で砂に絵を描くなど一人で砂遊びをしていることが多く、ほとんど一人でいたようです。時々、娘も遊びに誘うようにと保育士さんから言われた友達が声をかけにきました。そのように声をかけてもらえると、友達について行って一緒に遊んでいました。保育園児くらいの年齢の子どもだと、「キヤーキヤー」と大きな声を出して遊びに夢中になったりするもので、娘にもそのように元気に遊ぶ姿を期待していたのですが、どうもそうではなかったようです。保育士さんからは、「いつもおとなしくて、静かにしている。」と、そして娘の同級生のお母さんからは、「この子の声を一度も聞いたことがない。」と言われたことがあります。

小学校へ進んでも、友だちと遊んだりお喋りしたりすることは苦手だったようです。休み時間は、本を読んでいるか、一人で図書室へ行っているという過ごし方をしていました。友だちの輪の中へ入っていけなかったのでしょう。

4年生の時、社会見学でのバスの席を決めるのに、仲の良い子同士で座れるように決めていったら、娘一人が残ってしまったそうです。自分から友だちに声をかけることができない娘は、誰かが「一緒に座ろう。」と言ってくれるのを待っていたのだと思います。クラスメイトが次々とペアを決めていくのに、誰も声をかけてくれなくて、取り残されたようで辛かったと思います。先生が、一人残ってしまった娘に「誰と座りたいの？」と聞いたところ、泣いてしまったそうです。

授業では、国語の音読などは、小さい声ではありましたが、できていました。でも、先生から「もっと大きな声で読みなさい。」と注意され、やり直しをさせられたことがありました。けれど、何度やり直しても大きな声は出せませんでした。そのようなことが度重なり、娘にとって学校は辛いことが多い場所になってしまっていました。

家庭訪問や個別懇談のたびに、「友だちがいなくて寂しい思いをしていないか。」「あまりにもおとなしいのは何か障害があるのではないか。」と、娘を心配していることを話したのですが、先生からの答えは、いつも、「心配しなくても大丈夫。」というものでした。娘のほかにもおとなしい子がクラスにいて、学校の活

動などはその子と一緒にしているのに、友達が全くいないわけではない。授業中はきちんと座って熱心に授業を聞いているし、授業の内容も理解できているから心配ない、という話でした。私としては、もっと先生に係わってほしいと思っていましたが、保護者がそこまで要求することはできないような気がしてお願いすることはできませんでした。でも、おとなしくしている娘は、先生からも心に留めてもらえず、置き去りにされているような印象は拭えませんでした。

6年生の時、修学旅行のスナップ写真を娘に見せてもらった時、写真に写った娘の表情を見てハッとしました。どの写真を見ても、娘は能面のように無表情なのです。クラスメイトの女の子たちが楽しそうに笑ってピースしている中で、娘一人ニコリともせず写っているのです。

このままでは学校へ行けなくなってしまう。そんな心配が現実のものとなってしまったのは、6年生の3学期が始まった頃です。それからは、一度も小学校へ向かうことはなく、卒業式も出席しませんでした。

中学校へ進んだら変わりたい—という思いが娘にあったのだと思います。中学校の入学式には出席できました。ところが、3週間通っただけで、再び不登校になってしまい、中学校も卒業式には出席できませんでした。

高校へも入学式は出席できましたが、2週間通っただけでした。翌年から、通信制へ籍を移したところ、スクーリングやテストを受けに学校へ行くことはできました。この学校は、クラスはなく、文化祭や体育祭などの行事もありません。ただ勉強をするためだけに通うわけですが、そんな学校のシステムが人と係わるのが苦手な娘には適していたようです。通信制高校では、卒業式にも出席することができました。

高校卒業後は専門学校へ進みました。がんばって通っていたのですが、10ヶ月で行けなくなっていました。その後はずっと家に居る生活が続いています。

私が、『緘黙症』という言葉を知ったのは、娘の不登校が始まった頃です。極端におとなしい娘を、このまま放っておいてはいけなような気がして、図書館の精神医学事典で娘のような症例がないかを調べました。そこで見つけたのが、『場面緘黙』です。あまりに娘に当てはまる症例を見て驚きましたが、嬉しくもありました。今まで辛い思いをしてきたのは、本人のせいや性格のせいではなくて、場面緘黙だったから。治療を受ければ、娘を苦しみから救うことができると思ったのです。

娘にも場面緘黙のことを説明して、積極的に治療を受けてもらいたいと思いました。けれども、『場面緘黙』という言葉に娘に伝えるべきか迷いました。適応指導教室の先生に相談したところ、伝えるべきではないということでした。「病名を付けることに何のメリットもない。それよりも、親が子どものことをしっかり理解してあげることが大切。」と言われました。確かにそのとおりかもしれない、とその時は思いました。

中学2年生の頃、それまでは家族とは話をしていた娘でしたが、家族とも全く話さなくなっていました。

娘は病院やカウンセリングには行こうとはしなかったため、私一人でカウンセリングと相談室に通っていたのです。そこでは、どうしても不登校のみを問題視され、緘黙症についてはおざなりにされていました。当時通っていた相談室は、『子どもが学校へ行かないのは、家を居心地のいい場所にしてしまっているから』『仲良し親子ごっこをしては、いつまでたっても登校しない』という考え方でした。そこでまず指導されたのが、「子どもと一言も口を利いてはいけません。」というものでした。その指導に違和感を感じながらも、「言うとおりにしていれば、100%学校へ行けるようになる。」という言葉に信じることにしました。今までの私の子育てが間違っていたのだったら、正反対のことをすれば娘は元気になれるかもしれないと、一縷の望みをその相談室に託す決意でした。次には、娘を突き放すような態度で接することを要求されました。そ

れは、私にとっても辛いものでした。心の中で謝りながら、冷たく接するようにし、言ったこともないような厳しい言葉を投げかけたりしました。その相談室の手法は、親子の関係を壊し、そこに子どもと信頼関係を結んだ第三者が介入して学校へ引っ張っていくというものだったのです。結局、娘は第三者に引っ張られても学校へは行けず、挙句の果て、「あなたたちのような親子に関わっている時間はない。」と、相談室からも見切られたのです。何より悲しかったのは、娘は私とも一言も喋れなくなってしまったことです。突き放すような言葉をかけ、冷たい態度で接したために、修復不可能なほど親子の関係を壊してしまったのです。あれほど理解してあげるのが一番と思っていたのに、娘の信頼を裏切ってしまったのです。娘には「私が間違っていた。」と泣いて謝りましたが、その後、約 10 年、娘の声を聞くことはできませんでした。

成人してからも、就業などを考えるよりも、まず緘黙症を治してあげることが先決と思い、緘黙症の治療をしてもらえる専門家を探して、あちこちの病院や保健所の心の相談窓口を訪ねました。でも、「緘黙症の専門家はここにはいない。」「緘黙症のことは詳しくはわからない。」と言われることばかりでした。「緘黙症は子どもの障害だから、小児心療内科に聞いてみたらどうでしょう。」と教えられ、小児心療内科に電話で問い合わせたら、まず娘の年齢をきかれ、「当院は子どもさんを専門としていますので、大人の方はご遠慮いただいています。」と、話も聞いてもらえないこともありました。

現在、市の支援センターの職員さんに、月に一度訪問してもらっています。でも、その支援センターは、ひきこもりの支援を始めてまだ日が浅いようで、ひきこもりのことも勉強中、緘黙症のことは全然わからないみたいです。初めの半年ほどは、訪ねていただいた職員さんに娘の部屋へ入ってもらうことができました。部屋での様子は、職員さんが一方的に話をして、娘から話すことはない、返事もない、ということでした。そんな訪問が負担になったのかもしれませんが、ここ 3 ヶ月ほどは、娘が部屋のドアを開けなくなってしまう、会うこともできなくなっています。

幼少の時に場面緘黙がわかっていたら…。適切な治療を受けていれば…。娘の現在は、もっと違っていただかないと思わずにはいられません。一度しかない 20 代の青春を謳歌することもなく、友人と楽しい時間を過ごすこともできない娘が不憫で仕方ありません。でも、もう多くは望みません。せめて、自分らしく過ごせる場所で、娘の良さを活かせるような生き方をしてほしいと願っています。しかし、今のままでは、きっかけもつかめません。適切な支援を受けることができれば、どんなに有り難いことでしょう。支援の構築を切に望みます。

## 緘黙児だった私と子どもたち

南 すみれ(保護者かつ当事者・仮名)

私は保育園の頃から外ではしゃべれない子どもでした。家ではおしゃべりなくらい話のできたのに学校に行くとは何も話せなくなってしまいそれが高校生まで続きました。

就職しても一対一なら何とか話はあるようになりましたが何人かいるところでは何も話せなかったです。

このままでは大人になれないと思った私は家を出る決心をしました。21歳のときです。

私は少しずつでしたが人と話が苦にならなくできるようになりました。

私の子どもの頃つらかったことは遠足と修学旅行でした。学校にいる時はしゃべらなくても座ってさえいれば時間が経っていく。でも遠足はお弁当の時間が苦痛でした。

「私と一緒に食べてくれる友達はあるかしら」「一人で食べなければいけないのかな」といつも心配していました。

それと私がつらかったのは班替えでした。先生が「好きな子同士の班にしていよいよ」と提案したものなら私はいつも最後まで残り私と一緒にしてくれる人がなく嫌な思いをしました。「先生が勝手に決めてよ」と思っていました。

こんな事もありました。中学の時、私の後ろの席の子の牛乳を私がこぼしてしまい「ごめんなさい」という一言が言えずそれ以来いじめに遭いました。男子から「ばい菌、汚い」と言われ掃除の時私の机だけ運んでもらえず私の机は私がいつも一人で運んでいました。男子と女子が並ぶ時、私の横には誰も並んでくれる人がなくともつらかった思い出があります。あの時、一言しゃべることができていたらこんなつらい思いをせずにすんだのにと思いました。

子どもは3人ですが長男と次女は私と同じように学校でしゃべれない緘黙児でした。その長男は今、30代前半、次女は20代前半になっています。

長男は保育園のときからおとなしく先生も「ただおとなしいだけで手のかからないお子さんで問題ないですよ」と言われていたので私も心配しながらも学校に行って友達ができれば普通にやっていってくれると思って見守る事しかできませんでした。

小学校の頃、「声が小さい」と先生に注意され本人はどんな声を出したらいいのか分からずつい怒鳴ってしまったそうです。そしたら先生からよけい叱られそれ以来しゃべれなくなってしまったようです。コンビニにお弁当を買いに行ったとき店員さんから「温めますか？」と聞かれたとき「はい」という言葉さえ言えなかったと話してくれました。

息子は中学1年のとき不登校になりました。それから十数年引きこもり今も苦しんでいます。前は私とならなんでも話のできた息子が今では次女としか話ができなくなりました。

息子は何も過去のことは話してくれませんがつらい思いをたくさんしたのだと思います。

中学生の時、学校に行けなくなり神経内科へ一度だけ行きましたがその時、自分の気持を言うことが出来ず医者から「外に出なければいけないよ」といわれ本人は「外に出れないから苦しんでいるのに何も分かってくれない。もう二度と病院にいかない」と怒って帰ってきたことがありました。

次女は小学校1年生から学校へ行き渋り、私と一緒に登校し私と一緒に授業を受けていました。その時同級生の女の子から「おばさん〇〇ちゃんはどうしてしゃべらないの？」と聞かれたこともありましたが。

1年生の3学期から一人で学校に行けるようになりましたが、4年生からはまた行けなくなりました。

本人の希望で適応指導教室に行くようになり、そこで先生から手厚く関わってもらったお陰で、4年生の3学期にはおとなしかった娘がマイクを持ってみんなの前で歌が歌えるようになりました。一人でキャンプに行き、私の前でも先生と話をしている声を聞くことができ、これで娘も普通にしゃべれる子になれると私はすごく嬉しかった事を思い出します。

5年生になり学校に行ける事をどんなに期待したでしょう。

でも教室に入れなかったのです。保健室に私と一緒に通うことになりました。親子ともども辛く結局また夏休み前に適応指導教室に戻る事になりました。あんなに適応指導教室で楽しく過ごすことができたのに5年生になった途端、先生の態度が変わり娘に接するのが少なくなり、娘はまた前のおとなしい子になってしまいました。

「5年生になったのだからちゃんとしなさい。いつまでも先生に頼ってはいけません。」と言われ娘は適応指導教室に行く日もだんだん少なくなりました。

中学校へも行けず適応指導教室も行かない日のほうが多くなり、「高校は行かない」というので進学を断念しました。その後は兄と二人で過ごしています。

4年生のときしゃべれるようになったけれどまた戻ってきた時、自分に対して先生の態度が冷たく感じたのかまたしゃべれない子になってしまったのが本人にとってとてもつらい事だったと思います。

いま娘は兄に小学校の時つらかった話をするそうです。男の子からいじめがあったのをいまも思い出してつらい気持ちでいるそうです。

それを筆記で書いてくれます。兄も娘も私たち両親には何もしゃべってくれません。

娘はいま神経症で悩んでいます。自分を責め続けています。自分を責め続けている娘を見ていると、あの時もっと違う関わり方をしていれば・・・と悔やんでも悔やみきれない思いです。親もいろいろな所を例えば登校拒否の子の施設や県の児童相談所、神経内科、親の会、現在は県外の引きこもりの親の勉強会に8年ほど通っています。でもこれといった解決策もなく時間だけが過ぎて行きます。

私は自分がしゃべれるようになったから子どもたちもきっとしゃべれるようになるとずっと思ってきました。でもそうではなかったと思い知らされます。

私が「場面緘黙」を知ったのは娘の適応指導教室の先生に指摘された時でした。「この子は場面緘黙ですよ」と言われ初めてその言葉を知りました。そして、私も場面緘黙だったんだと気がつきました。

でもその時は「自分もそうだったのだからきっとこの子たちもいずれ治る」と思い何も先生に頼らなかったしこれといった打開策もとりませんでした。「大人になったら治る。きっと自分で解決して行ってくれる」と信じていました。先生は子どもがしゃべらないのは親が甘やかしているからだと思っていたようでした。

もっと親が先生方や医療機関に働きかけたほうが良かったのか今は自問自答している毎日です。

大人になってもまだ苦しんでいる子どもたちがいるということを理解していただいて適切な支援を切にお願い致します。

## 生きにくさを抱えて

中山 千恵子(当事者・仮名)

いつだったか、声がつぶれていて、かすれたような声でしか鳴けない子猫を拾ったことがあります。小さな声で「ヒイ…ヒイ…」としか鳴きません。

きっと、動物の世界でも、大きな声で泣く赤ちゃんは、仲間を押し分けるようにお母さんのおっぱいをたくさん飲んで、たくましく丈夫に育つような気がします。

…でも、鳴きたくても声がかすれて小さな声でしか泣けない赤ちゃんは、存在感が薄くて、餌にもうまくありつけず、やせっぽちでひ弱で、いつか淘汰されてしまう運命なのかも知れません…。

と、…そんな風に、声の出ない子猫と、緘黙児だった自分を重ね合わせて見ていたことがあります。

40年前…保育園生活が始まった時から、私は生きにくさを覚えました。

家から一歩外に出ると、なぜか思うように喋れないのです。

その、“なぜか喋れなくなる”のは、今思えば慣れない環境に順応できずパニック状態だったのではないかと思うのですが、当時子供だった私にとっては計り知れない“大きな謎”でした。

私の人生は言わば、その“大きな謎”に翻弄され続けてきた人生といってもいいかも知れません。

いつか私も、普通の人と同じように喋れる日がくることを、秘かに夢見ていました。

どうしたら普通の人のように話せるようになるのか？ 答えのない迷路の中で、自分なりに打開策を見つけようしました。でも、それは例えば、安易に結婚をし、子供を産み、育児をし、自分の悩みから目を逸らすことで、私の“謎”も、いつか消滅してしまうのではないかと思ったりしました。

しかし結婚生活や子育ては、実際そんな甘いものではありませんでした。小さな子供を育てるということは、日々過去のトラウマとの戦いでもありました。そして自分の子供も、同じ「緘黙症」という道をたどるのではないかという不安が常に付きまとうのでした。

幸い、子どもたちは緘黙症で悩むことはありませんでした。

しかし私には緘黙児だった過去の自分と対峙せざるを得ない時が来ました。

息子の小学校のPTA役員をやった時、ついに私の中のトラウマが爆発したのです。私はその時、PTAの副会長をやっていましたが、他の役員の方たちと上手くコミュニケーションが取れず、孤立してしまい、歓送迎会の席で、いたたまれなくなり、他の役員の方たちの前で嗚咽し泣いてしまったのでした。それはまさに、小学校時代の再現であり、封印していた心の傷がパッキリ開いてしまった瞬間でもありました。

子供のころの私は、いつも所在のなさを感じていました。私が私でないようなフワフワ浮遊した感覚の中で世界を見つめていました。離人感とでもいうのでしょうか？ 保育園に入っても私はそこに存在していないかのように漂っていました。園の仲間たちとか、保育士の先生方と、どう関わっていいのかが解りませんでした。先生が出欠の点呼をするときでも、私は返事ができませんでした。私は保育園にいても、そこにいないような子供でした。保育士の先生も、扱いに困っていたようでした。まるで透明人間のような子供でした。

かといって、この子はなぜ言葉が出ないのか、親も真剣に心配などしてくれませんでした。とにかく、喋らないのは自己責任であり、本人が悪いとばかりに責められました。いつも母からは、「おまえは気が小さい」とか「そんな大人しい事じゃ駄目だよ」とばかり言われて育ちました。

そうは言われても、喋ろうとすると、胸が張り裂けそうなくらいにドキドキしてしまうのでした。



それでも無理に喋ろうとすると、自分が自分じゃないような感覚に陥って、頭が朦朧としてしまうのでした。「私はみんなと違う変な子どもなのだ」と、だんだん思うようになりました。

なぜ、私はみんなのように話せないのか・・・？

人間には理解できないことがあると、それだけでストレスになるそうですが、そういった心の葛藤を持ち続けることは、精神的な負担でした。

さらに学校でも、先生やクラスメイトからも、「なぜそんなに喋らないのか？」と、故意に喋らないのだと決めつけられていました。そうやって責められるほどに、ますます私は孤独に突き落とされ、どんどん落ち込んでいきました。子供時代は、まさに孤独と不安の連続でした。

また、集団生活において喋れないということは、自分を守れないということでもありました。いじめられても反撃できないのです。言葉とは自己主張であり、自分の全存在を示す手段だと思えます。喋れないということは、人間として大きなデメリットです。私にとって、学校という所は、まさに「生き馬の目を抜く」ような場所でした。喋れなければ無視される。自分を表現できなければ、正当に評価を受けることもありません。

私は精神的に追い込まれ、自信を失っていきました。自分のことがますます嫌いになっていきました。

喋れないということは、アイデンティティも不安定で、人格形成においても大きなハンディをもたらします。自分はなぜ普通の人のように喋れないのか、なぜこんなにも惨めなのか、悩みは膨らむばかりでした。

かといって、自分の悩みを受け入れてくれる受け皿はどこにもありませんでした。

また、私を追い詰めたのは家族関係でもありました。

私の父も非常に内向的で、声もか細く、自己表現の苦手な人でした。父は建築関係の仕事をしていましたが、「とても物静かで大人しい大工さん」と呼ばれるくらいでした。そして父と私はよく似ていました。

その似ているということで、私は父に対しすごく気を使いました。父も緘黙症傾向の人でしたから、母は時々父に対し、ひどく見下げた態度を取ったりしていました。私は、そんな父の姿に自分を重ね、いつも同情を寄せていました。父が、母にひどく罵られれば、私は母に対して憎しみを抱きました。

父に対して気兼ねしていたからこそ、自分の緘黙症を表沙汰にはできないという思いもありました。

私が学校で思うように喋れず、友達もいないことを父に報告すれば、父をもひどく傷つけてしまうような気がしました。

ですから、この緘黙症という特徴のせいで、家族の者さえ嫌な思いをさせてしまうのではないかと、という罪悪感や負い目を、常に持っていました。

結局「喋れない性格は父譲りだから仕方がない」とも諦めていた部分もあります。

こういう緘黙症は遺伝であり、呪われた血でもあり、決して口外してはいけない家族の秘密だとさえ思っていました。(緘黙症という障害が、それだけオープンには語れない暗い性質だったからということもあるのでしょうか)

私の成育歴の中では「緘黙症」というのは、自分の中で処理すべき問題であり、自分一人で抱えていた悩みでした。

私が「緘黙症」という言葉を知ったのは遅く、子育て中に読んだ育児書の中でした。

それでも紆余曲折あり、自分の中のこの「生きにくさ」の元凶は一体何なのか？これまでもいろんな自助グループに身を置いたりしましたが、解決はしませんでした。

しかし、かんもくの会で同じような悩みを持つ皆さんと出会えたことで、ようやく心の荷が下りたような気がします。こうして体験記を書く機会にも恵まれました。

どうか「緘黙症」という障害への理解が社会に広がることを希望します。

そして、緘黙症の子供たちが、不安なく安心して過ごせることを願います。

## 支援により笑顔になった娘

松田 明子(保護者かつ当事者・仮名)

現在小学4年生になる娘は、赤ちゃんの頃から泣くことも少なく手のかからない子でしたが、人見知りや激しく、不慣れな人の前では発話することもできなければ笑顔を見せることもできませんでした。

幼稚園でも発話することも動くこともできずに、周囲の子が踊っている中、一人で椅子に座ったままのこともありました。年少の先生からは「小学生になれば話せるようになるから大丈夫よ」と何度も言われました。友達ができずに不登園になった年長では、先生から「お母さんの愛情不足」だとはっきりと言われました。

幼稚園では、私なりに改善するよう取り組んできたものの、目に見えての改善は得られませんでした。

小学校入学後には完全に場面緘黙になった娘のことを「お返事ができません。体育に参加できません。」と連絡帳で知らされました。それから、問題にぶつかる度に先生と協力してサポートを続け、2年生の3学期にはお友達や先生とも発話することができるようになり、一度だけ授業中の発表もできました。

実は、母親である私も幼少時代を場面緘黙で過ごしました。小学2年生頃には、学校内のほとんどの場面で発話ができない状態にあったように思います。周囲の視線が気になると動きが緩慢になり、緘黙以外にも緘動のため、多くの失敗体験を積んできましたが、その状態が「緘黙症」と呼ばれるものであることを知らず、人前で話せないのは自分だけではないかと思っていました。

幸い周囲の理解と温かいサポートがあったお陰で、小学校高学年には学校生活で最低限必要な発話ができるまで改善しましたが、成人後も後遺症に苦しみ、高校卒業後、約10年をかけて克服しました。

また、私の母も小学生時代を場面緘黙で過ごし、卒業と同時に発話できるようになった経験があり、緘黙症は自助努力により改善していくものだと思い込んでいました。

2年生で改善の兆しを見せ始めた娘ですが、3年生のクラス替えを機に、また完全緘黙になりました。どのように対処して良いのか分からず、打つ手がない現実と一度発話できるようになった経験があることから、これは娘が生まれ持った気質であり、私のように本人の自助努力により乗り越えるものだから、親としては見守ることしかできないのではないかと思うようになりました。

しかし、娘も私のように成長と共に改善していくものと認識していた私は、娘が3年生の夏休みに行なわれた個人面談で苛酷な現実を知ることとなりました。先生を前に無表情で立ち尽くす、これまでに見たこともない完全な緘黙・緘動の娘の姿を目の当たりにして、動揺を隠しきれませんでした。

娘は私が経験したこともない緘黙・緘動状態にあり、これは性格や気質などというもので片付けられるものではないということは一目瞭然でした。

自宅に戻り2日間かけてインターネットの世界を彷徨い続け、ようやく「場面緘黙」に辿り着き、娘の状態を知りました。そして、私自身や母が経験した状態も「場面緘黙」であったことを初めて知ったのです。

そして、緘黙症は幼い頃のみには現れる症状ではなく適切な支援が施されなければ成人まで持ち越すことがあるという、これまでの私の認識を大きく覆す衝撃的事実を知りました。場面緘黙の経験者でさえ「大人になれば治る」という誤った認識でいたのです。これまで幾人かの専門家からも「大人になれば自然に治る」という言葉を聞きました。

かんもくの会に入会して成人後も辛い人生を送っている当事者の方が多くいることを知り、改めて緘黙症は幼少期だけの問題ではないということを実感しています。

インターネットで緘黙児への支援法が著された「場面緘黙児への支援」があることを知り、この指導書を参考に保護者・学校・専門家で連携を取り支援を実践したいと思いました。直ぐに学校・教育委員会・公共機関に支援を実践したいと申し出ましたが「そんな支援はできない」と断られました。

徹夜続きで娘の緘黙状態や支援の重要性、なぜ指導書を実践したいのかを記した資料や請願書を作成し、何度も支援の実践を懇願した末、ようやく支援に対しご理解をいただき、昨年8月に学校長・担任・学年教員・特別支援教育士・保護者の私とで支援チームを結成することができました。

指導書を参考に会話力の階段を作成し、先ずは席替えを行ないました。母親の私が発話練習のための場面設定をし、安心レベルを高める取り組みや発話練習をこの一年で200日以上実践してきました。場所に分けると学校内160回、学校外230回以上になりますが、仕事を持っていたため発話練習の日程を組むことも仕事との両立も困難でした。仕事のため思うような発話練習が行なえず、娘の支援を優先するために止む無く仕事を辞めました。退職後はほぼ毎日、学校への昼休み訪問を続けています。

発話練習では娘が発話しやすいような状況や発話を促す会話の流れを作ります。発話ができるようになると次はその状態を維持し定着させるために何度も同じ人物と発話練習を重ねます。家庭・学校外・学校内の全ての場面で発話の失敗がないよう、娘が現在どの段階なのかを担当に報告して学校生活や授業内での人物・場面・活動設定に役立ててもらうためにも、保護者と学校の連携は必要不可欠です。

支援を始める前の娘は学校内では一人の友達としか発話ができず、特に相手が先生や男子児童になると完全緘黙・緘動で泣き出すこともありました。学校活動には何とか動ける状態で参加はできていましたが、緊張と不安から常に無表情でした。家庭でも学校に関する話になると、下をうつむき緘黙状態になり泣き出すこともありました。登校時も家を出る時から緊張で体が硬直した状態でした。

それが一年経った今は、学校内でも多くの女子児童と話ができるようになり、男子児童の前でも声を聞かれることに抵抗しなくなりました。まだ先生との発話はできていませんが、誰よりも楽しそうに元気に学校活動に参加するようになりました。学校外で発話ができなかった人達とも発話できるようになり、家庭でも驚くほどお喋りになった娘は学校での出来事を楽しそうに話してくれます。

そして、娘自身も「話せるようになるように頑張りたい」と前向きになり、支援の成果を実感しています。

指導書の方法に従って支援を実践することによってこれだけ素晴らしい成果を得ることができました。

しかし、支援は苦悩と葛藤の連続でもあります。支援チームを結成しても学校の先生方はお忙しく、これまで前例のないチームとしての体制を成し得るには、並々ならぬ努力が必要です。チームとしてようやく軌道に乗ったところでクラス替えがあり、また新メンバーで一からチーム体制を整えなければならず、私の苦悩は尽きることはありません。

また、自分たちだけでは壁に突き当たることもしばしばあるので、支援チームへの援助を希望して幾人かの専門家を訪問しましたが、支援に対し理解を示して下さる専門家になかなか出会えずにいます。

今後も娘の支援を続けていくには保護者の私が身を粉にして頑張るしかないと感じています。これまでの約一年間の支援の成果と、支援開始まで緘黙状態にあることを了知しながら娘に大した手立てを講じてあげることができなかった後悔の念、そして、何より娘を想う母としての愛情が、今の私の原動力です。

この度、幸い私はこうして体験記を書かせていただく機会に恵まれました。しかし、緘黙症で困っている他の多くの方々には一体どこへ要望を訴えればいいのかのでしょうか。

一日も早く緘黙症を取り巻く環境が改善され、さまざまな緘黙症当事者に適した支援方法が確立されることを切に願っております。

本体験記集は、緘黙症に関する研究や研修会などで自由にお使いください。お知り合いの緘黙児の保護者や教師、心理相談員の方々に配布して下さっても結構です。

ただし、上記のような緘黙症の知識の普及など関係のない目的で使用する場合は、事前に当会へ使用目的をお知らせください。検討のうえ、使用の許諾を判断します。

とくに、商用目的で本体験記集または体験記の一部を無断で使用することは固くお断りいたします。使用を希望される場合は事前に当会へお知らせ下さい。

本体験記集はかんもくの会のホームページからもダウンロードできます。

<http://asmjapan.org/index.php>